茨城大学教育実践研究20（2001），33－47

附属養護学校の学校研究主題「21世紀に生きる子どもたちの社会参加を目指して」における小学部の取り組み

――「共に活動し意欲を高める支援の在り方」――

川上達也**，鈴木広美*，木村千尋**，榎本雅充**
大森美代**，小野美穂**，安達孔一**，勝二あすか**
仁田由美***，鈴木敏次****，松村多美恵*****

（2001年4月27日受理）

Study Theme of Attached School for Mentally Retarded Children " Social Participation of Children in the 21st Century " : A Study of the Elementary Department " How to Help Students Perfom with Teachers and Enhance Their Volition "

Tatsuya KAWAKAMI, Hiromi SUZUKI, Chihiro KIMURA, Masamitsu ENOMOTO
Miyo OMORI, Miho ONO, Kouichi ADACHI, Asuka SHOJI, Yumi NITA
Toshiji SUZUKI and Tamie MATSUMURA

キーワード：共に活動する，意欲を高める，支援の在り方

附属養護は平成12年度より，学校研究主題「21世紀に生きる子どもたちの社会参加を目指して」の実践研究に取り組んだ。この主題と副主題『「しごとをする」につながる支援の在り方』を受け，小学部では「共に活動し意欲を高める支援の在り方」のテーマを掲げ実践研究を行った。「朝の活動」の時間における係活動を中心に，教師のかかわりを通して児童が意欲的に取り組めるようになるための支援の研究に取り組んだ。まず，係活動を4つの区分に整理し実践を行い，その中で，教師と共に活動し，意欲の高まった指導例を2事例挙げた。これらの指導例の考察から，小学部段階において，教師が共に活動する場面の中で児童一人一人に応じたかかわりすることで，満足感，充実感を味わわせることが重要であることが分かった。そしてその結果，児童の意欲が高まることが確認できた。

* 県立土浦養護学校　** 茨城大学教育学部附属養護学校　*** ひたちなか市立田彦小学校
** 県立水戸養護学校　***** 茨城大学教育学部障害児教育講座

Ⅰ はじめに

本校では平成４～７年度にかけて，研究主題「一人一人に即した指導法の探究－よりよい指導の個別化を目指して－」の下，社会のニーズを考慮し，児童生徒一人一人に応じた指導を目指してきた。そして，本校「指導システム」の基盤づくりを行い，実践を行った。

さらに，平成８～11年度にかけては，研究主題「個人カルテと指導プログラムを活用した指導法の探究」の下，日々の実践の中で「指導システム」の活用の推進と充実を図り，指導内容，指導方法等，指導の質を高めながら，実践研究を進めてきた。「指導システム」は一般的に行われている一連の指導の流れ＝「指導の過程」に沿って作成したものであり，我々が日々繰り返している指導の表れである。その一連の過程の中で，「個に応じた指導の明確化」という社会のニーズに適応した本校の「個別の指導計画」を作成することができた。この「指導システム」の一連の流れは，我々が指導を行うベース，すなわち，本校の指導の基盤となるものである。（「指導システム」詳細については，本校研究集録第20集参照）

我々が21世紀を迎えた今日，社会は目覚ましい変化を遂げている。国際化，情報化，科学技術の発展，環境問題への関心の高まり，高齢化・少子化など様々な変化が急速に進んでいる。その一方，様々な施策が総合的・計画的に進められ，主体的に参加できるような社会づくりが進展している。障害児を取り巻く環境としては，障害の重度・重複化の傾向の拡大，早期からの教育的対応に対するニーズの高まり，卒業後の進路の多様化，交流教育の推進等が挙げられる。

よって，我々は新しい「社会」の変化により一層着目していく必要がある。平成11年度３月の新学習指導要領にも明示されているように，我々は将来及び現在において，児童生徒が一人一人を取り巻く社会の中で主体的に生活し，自分らしい生き方を実現していくことができるよう，自己のもつ能力や可能性を最大限に伸ばしていくことが必要である。また，自ら学び自ら考える力を育てるために，自己選択，自己決定の機会を多く設け，より主体的な生活につなげていくことが重要である。

以上のことから，我々は将来及び現在の子どもたちの姿を考慮し，新しい「社会」の中で子どもたちが「主体的に生きていく」上で必要なことは何かを考え，21世紀という開かれた未来に希望をたくし，一人一人に即した新しい「社会」への「社会参加」を目指した指導について，実践研究することとした。

次に我々は「社会参加」から求める子どもの姿，その姿を実現させるために必要とされることについて，話し合いを行った。結果を図１に示す。

ここで我々は「社会参加」から求める子どもの姿として意見が多かった「仕事をしている子」に着目した。ここでの「仕事」をする状態とは卒業後に事業所等に就職し，給料をもらい，生活しているといった狭いとらえ方ではない。そこには小学部段階での係活動や家庭での手伝いも含まれてくる。すなわち，「しごと」は能力の高い低いに関わらず存在するのである。そこで我々は「仕事」を「しごと」と平仮名表記することによって，幅広い解釈ができるようにした。

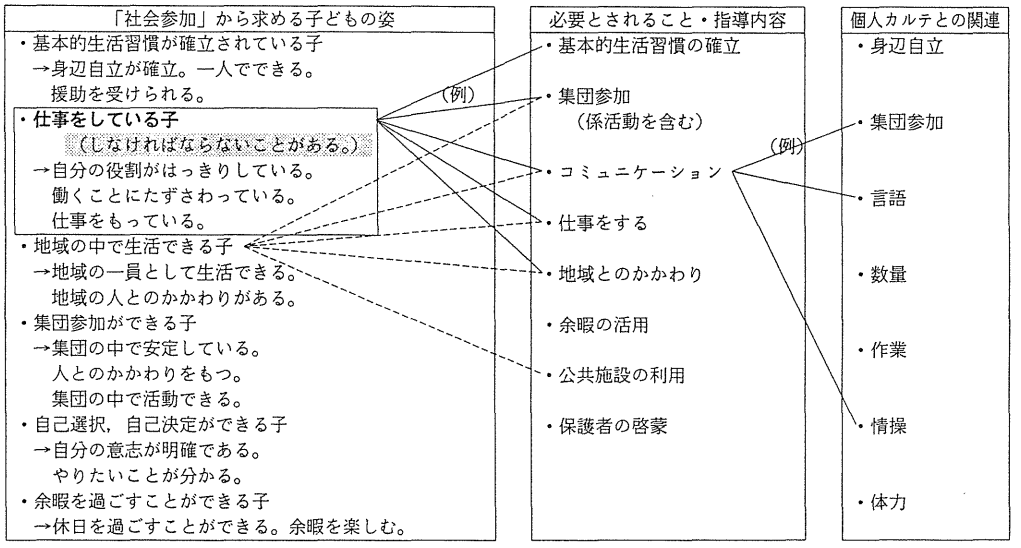


図１　「社会参加」から求める子どもの姿及び必要とされること

「しごとをする」こととは，１日の生活の中でしなければならないことがある（その子の生きる・活きる時間が存在する）ことであり，しなければならないことを「行う準備ができている」または「行っている」状態である。一方，「しごとをする」ことには，生活の基礎となる「仕事をしてお金を稼ぐ」ことまで含まれると考えられる。「しごとをする」ことは，周囲の人のためであったり，何かが生産される（物体の生産ばかりでなく）ものであり，結果として自分の生活と結び付いてくる（生活に関連する何かが起こる）ものである。また，「しごとをする」ことは，人とのかかわりを伴うものであると考えた。このように我々は，ただ「しごとができる」という表面的なことだけではなく，「しごと」を通して，子どもたちが人とのかかわりをもって生活できること，さらには社会における自分の存在を認識できる機会となることを願っている。これらの「しごとをする」ことが我々の目指す「社会参加」に結び付いていくのではないかと考え，副主題を『「しごとをする」につながる支援の在り方』として実践研究を進めた。

これを受け，学校生活のスタートである小学部においては，「しごと」を生活の中で「役割」ととらえた。そこで，学校生活での「しごとをする」を係活動を行っている状態ととらえ，「係活動（学級・学部の役割）」に着目し，その指導のなかで児童の意識・意欲の向上をねらいながら，その児童に段階的指導を組み立てることについて検討を行った。

Ⅱ　小学部の取り組み

１　「しごとをする」について

小学部では，小学部段階においての「しごとをする」状態について教師間で協議を行った。そこで，「しごとをする」という言葉から「係活動をすること」「清掃を行うこと」「当番活動をすること」「日直，司会などを行うこと」「お手伝いをすること」などが挙げられた。これら一つ一つ

は児童にとって，生活の中で役割として与えられているものである。そしてこれらを行っている状態は，最終的には児童が主体的に取り組む活動であることが求められているといえる。すなわち，児童が役割を自分に与えられたものとして主体的に取り組む姿は，将来の「社会参加」の求める姿として考えた，「しごとをする」状態として求められる姿であると言える。そこで，役割については，以下のようにとらえた。

役割…「その子がいる集団の中で，その行為を成したことにより，他者（その子のいる集団も含む）にプラスの働きかけをすること」

次に，「役割」や「役割を果たしている状態」を考えると，小学部段階では，家庭と学校での生活場面における行為があり，それぞれ「手伝い」と「係活動」に区分されると考えた。そして，我々が直接的に指導可能で，指導の経過を追って評価ができる学校生活場面の「係活動」に着目した。

さらに，「係活動」を行う上で必要となること（求められる能力や基礎）として，図２に示すようなア～カの６つがあると考えた。これらを本校「個人カルテ」の領域に照らし合わせてみると，ａ～ｇの関係性が考えられ，係活動と図の矢印のような相互関係が成り立つと考えた。この相互関係とは，「係活動」のベースとして必要なことであったり，または「係活動」ができるようになると同時に備わって欲しいことが表されていると言える。よって，「身辺自立」「体力」（自分のことは自分でできる力）を基盤とし，「言語」「作業」（コミュニケーション能力や生産活動をするために必要な技能），「集団参加」（集団・社会生活へのよりよい適応力）のいろいろな要因を併せもたせながら指導していくことが重要であるととらえた。すなわち，係活動を行うためにはａ～ｇの力が必要となり，係活動を行ったことによりａ～ｇの力を育てることができると考えた。

また，「係活動」が児童の主体性を引き出す場面ととらえると，その指導の過程で意識・意欲の面を重視して指導する必要があると考えた。意識・意欲の面については，「活動に積極的に取り組める」「活動が速くできる」「表情よく活動に取り組める」という児童の変容が見られれば，意識・意欲が向上したととらえることができると考えた。

このように，「しごとをする」を「係活動」の切り口でとらえることは，小学部という基礎を築いていく段階では，その含まれる内容そして主体性を育てる側面からも有効であると考え実践研究に取り組むことにした。

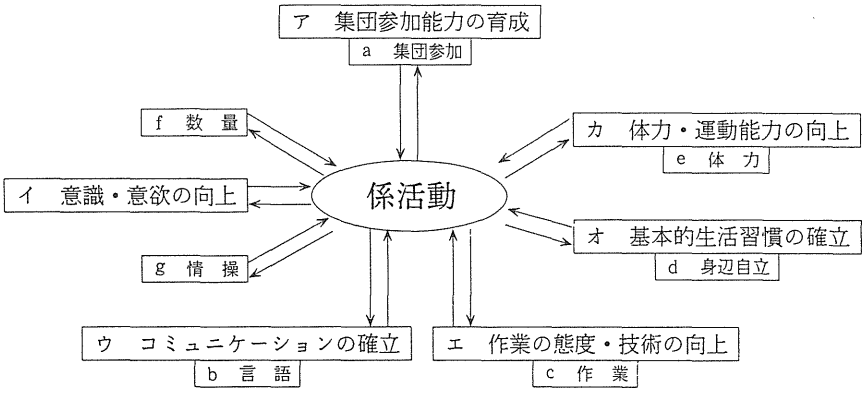


図２　係活動の押さえ

2　「共に活動し意欲を高める支援の在り方」について

前述のように本研究の副主題『「しごとをする」につながる支援の在り方』を小学部段階で考えるに当たって，「しごとをする」を，「役割」（係活動）ととらえて研究を進めることにした。そして，この「役割」という言葉は，「個人カルテ」の「集団参加領域」に「項目」として存在するので，その関連性を見てみると，「係活動」はその中に含まれているものととらえることができる。そこで，「個人カルテ」の「集団参加領域」に視点を当てながら，本校の「指導システム」を活用し実践研究を行うことにした。その際，次の３点を考えた。

児童が係活動を役割として一人でできるようになるためには，まず，係として与えられた活動ができる技能を身に付けることから始まる。次に，その活動を自分に課せられたものとして（そこまでの理解は難しいことも実態としては考えられるが）スムーズに取りかかれたり，意欲をもって主体的に取り組む段階などが考えられる。すなわち，教師や友達と一緒に取り組みながら活動に慣れさせていくことから始まり，教師や友達の賞賛・評価を得ながら（関係性を保ちながら）取り組みに前向きになっていくことが考えられる。ここで重要になってくることを，小学部の段階では「共に活動すること」ととらえ第一に考えることにした。

第二に，児童が係活動を行った結果，評価を得ることになるが，その評価を通して，役割を果たせたという満足感，充実感をもつようになると考えられる。その結果，他の活動ももっとやってみようと意欲が向上し，その自信が生活全体へと広がっていくのではないかという意識・意欲の面の変容を重要視した。そして，「意欲を高める」ための指導の検討が必要なこととして挙げられた。

第三に，「個人カルテ」の「集団参加」の領域における指導プログラムを作成し，係活動を指導していく上での「支援（指導）の在り方」についても考えた。そして，始めは示範や補助，次に活動を見守りながらの言葉かけへといった段階的な支援が必要になると考えた。この支援についても，児童一人一人に応じたかかわりがあり，効果的な教師の支援を見出だすことも重要な検討課題になると考え実践していくことにした。

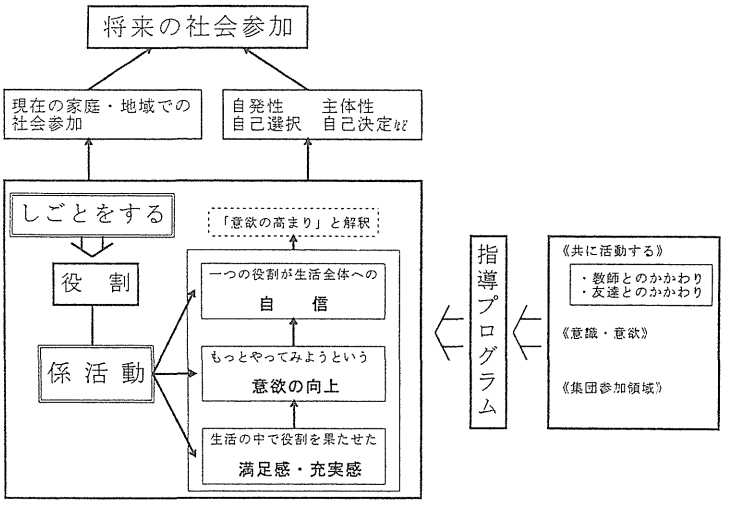


図３　部研究の構造図

上記のことを図式化したものが図３であり，３つのキーワード「共に活動する」「意欲を高める」「支援の在り方」から小学部テーマ「共に活動し意欲を高める支援の在り方」を設定し，実践しながら検討を重ね，研究を進めることにした。

３　係活動について

小学部の児童20名について，「個人カルテ」にある「集団参加」領域の下位項目「役割」での達成度を調べたものが図４である。

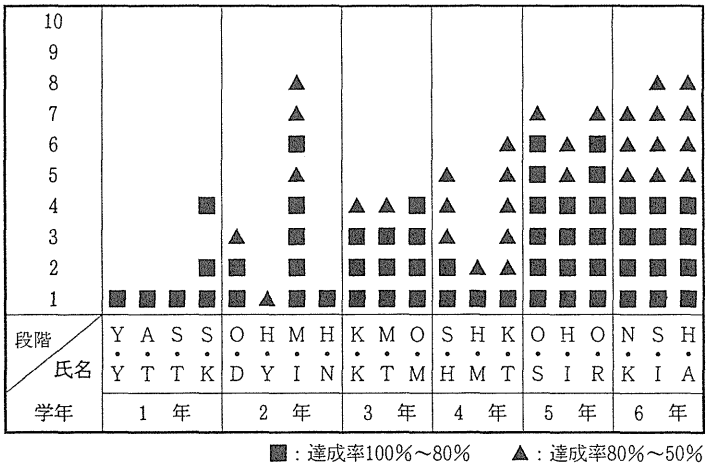


図４　個人カルテ下位項目「役割」での達成度

図４を見ると，小学部では，学年が進むにつれ，達成度が増えていることが分かる。しかし，細かく見ると，学年の中にも相対的比較において理想的な成長の伸びに至らない児童も見られ，児童一人一人に即した係活動を設定する必要性を感じた。そして，これまでの児童の実態と保護者・教師の願いによる設定の仕方では，教師の支援に頼り過ぎる係活動になってしまい，発達段階に即した指導が十分に行われていないのではないかという疑問が出てきた。これはすなわち，指導が手厚すぎたり実態より難しいことをねらってしまったりと，係活動の分析が不十分なために起こっていたのではないかと考えた。

そこで，係活動を２つの視点，「他者とのかかわり」と「活動に対するねらいの数」に着目しながら，児童の現在行っている係活動を洗い出すことにした。他者とのかかわりとは，係活動を実行するに当たり，その活動が実行者本人の意思（パターン化も含む）によって行われる段階か，周り（環境も含む）の状態をとらえて行われる段階かで区別する視点であり，活動に対するねらいの数とは，その係活動がいくつの内容またはねらいを含むと考えるかの視点である。そこでこの視点によって係活動を分析すると，児童の発達段階に応じた図５のような関係が成り立つと考え，係活動の４つの区分（A～D）を導いた。縦軸方向は１つの係活動を行った時のねらいの数を表し，横軸方向は他者とのかかわりの有無を表している。

この係活動の４つの区分（A～D）をそれぞれ「A　個別に取り組む１つの活動」「B　個別に取り組む複数の活動」「C　他者とかかわる１つの活動」「D　他者とかかわる複数の活動」とした。Aとは，他者とのかかわりのない場面や状況で教師の１つのねらいのもと行う活動を表す。さ

らに，教師のねらいが複数になると区分はＢとなる。また，ねらいが１つであっても，教師や友達とのかかわりのもと行う活動はＣとなる。そして，ねらいが複数存在し，他者とかかわる活動がＤとなる。

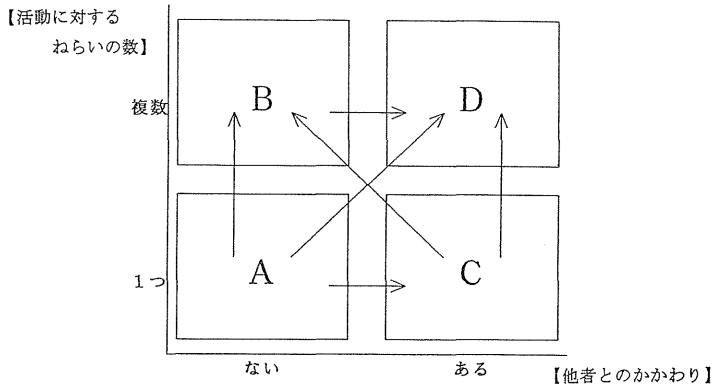


図５　係活動の４つの区分（Ａ～Ｄ）

これらＡ～Ｄには，難易としての段階性もあると考え，それは図５の矢印で示す。４つの区分の係活動のねらいは以下の通りである。

Ａ「個別に取り組む１つの活動」：教師とのかかわりや教材によって定着を図り，係活動への意識をもたせる。

Ｂ「個別に取り組む複数の活動」：パターン化した活動で定着を図り，手順を意識して一人で確実に係活動ができるようにさせる。

Ｃ「他者とかかわる１つの活動」：コミュニケーションを通して，集団の一員であることを理解させ，活動を行った充実感をもたせる。

Ｄ「他者とかかわる複数の活動」：集団への意識をもって自主的に活動させ，係活動に責任をもって取り組ませる。

これらの区分をもとにこの研究では，指導場面を朝の活動（登校時から朝の会終了後の授業準備や排泄指導までをさす）に限定し実践することにした。また，ＡからＤに到達するまでに，Ａ～Ｄのねらいにある意識・意欲の向上を図りながら，段階的に目標を設定する事への有効性についても検証した。

Ⅲ　活　動　の　実　際

平成12年度の「朝の活動」場面における係活動に視点を当て指導を行った。その活動の中から，「係活動の４つの区分」の中で，教師と共に活動し，指導効果の現れたＡ区分とＢ区分の事例を取り上げる。なお，この事例の対象児の変容については，本校の指導プログラム書式を一部手直しし，考察していく。指導プログラムの項目は，(1)対象児について　(2)指導方針　(3)指導ステップと対象児の変容　(4)まとめを項目順に述べる。

また，意識・意欲の面の記述には◎表記（指導方針，変容，まとめ）をし，係活動に意識をもたせたり，意欲の向上を図った教師の意図が分かりやすいものとした。

1　「教師とのかかわりの中で，学級内の簡単な係活動に取り組むことができることを目標とした指導例」（区分－A）

(1)　対象児について

○対象児　　小学部２年　８歳　女

○主障害　　てんかん

○諸検査　　田中ビネー知能検査　ＩＱ－測定不能

　　Ｓ－Ｍ社会生活能力検査　ＳＡ－１歳７ヵ月

○目標に関する実態

＜役割に関する実態＞

・学習カードを黒板にはる活動など好きな活動は意欲を示すが，活動への取りかかりのタイミングがずれたりすると，嫌がったり床に寝転がったりするなど，安定して活動に取り組むのは難しい。

＜その他＞

・持ち物の整理は，教師が側で置く場所や入れる場所を言葉かけと指さしで促すと行うことができる。しかし，教師が側から離れたり，置く場所までの間に遊びたい遊具や興味を示しそうなものがあると，すぐに気持ちはそれてしまう。気持ちがそれてしまうと，再び活動に取り組むまでに時間がかかる。

・好きな遊び（滑り台，自転車乗り等）から次の学習場面に移る際には，気持ちの切り替えが難しく，時間がかかることが多い。

・一人遊びが中心である。しかし，教師が積極的に追いかけっこをしたり，一緒に滑り台で滑ったりするかかわりをもつと教師の手を引いたりするなどして，一緒に遊ぶよう求めたり，教師が側にいることを求めてくる。

(2)　指導方針

○毎日繰り返し取り組めるよう朝の会終了後や教室移動時に活動の場を設定し，活動の定着を図る。

○教師と一緒に行うことから始め，本人の意識を徐々に育てながら，少しずつ自分で取り組めるように段階的な指導をする。

◎取り組みを側で見守り，必要に応じて言葉かけをしていくことで自信をもてるようにし，活動への意欲を育てる。

◎取り組みへの態度や変化を賞賛することで，できた満足感を得られるようにする。

(3) 指導ステップと対象児の変容　　(指導期間平成12年５月～平成13年１月)

短期目標１	教師と一緒に電気係の活動に取り組み，活動に慣れることができる。
手　だ　て	変　容
①言葉かけをし，活動を知らせる。 「Ｎちゃん，電気を消そうね。」 ②電車ごっこをしながらスイッチの所まで一緒に行き，スイッチの場所を注目できるよう指さしをする。 「Ｎちゃん，スイッチの所まで行こうね。」それー。しゅっしゅっぽっぽ，しゅっぽっぽー。」 スイッチを指さしながら「こっちだよ。」と興味を引く。	・楽しく取り組めるよう電車ごっこをしながら近づくことで，スイッチの所までの移動がスムーズになった。
③２つのスイッチは教師がやって見せ，残りの１つを消すよう促す。 「Ｎちゃんと，先生と，電気をパチーン。」 本児が消す時には「それー。パチーン。」 ④消すことができた時には，本児の自信につながるよう賞賛する。 「やったー。できたー。」（手を取りジャンプしたりしながら）	◎教師が興味を引くよう楽しくやって見せることで，本児も「それー。」と言いながら楽しそうにスイッチを消すことができた。 ◎繰り返すことで活動に慣れ，徐々に自信がついてくると，他のスイッチ（教師が消していた分）も自分で消そうとする様子が見られ，意欲が見られた。

短期目標２	言葉かけなどで，電気係の活動に取り組むことができる。
手　だ　て	変　容
①言葉かけをして様子を見守る。 「Ｎちゃん，電気パチンと消してね。お願いします。」 ②取り組まない時は，教師が先にスイッチの所まで行き，再度言葉かけをし，指さしで促す。 「Ｎちゃん，こっちだよ。」 「Ｎちゃんが電気消してくれると，先生嬉しいな…。」 「Ｎちゃんが嫌なら，先生がやってみるからね。見ててね…。」 ・随時励ましたり，賞賛したりする。 「Ｎちゃん，がんばれー。それー。」 「できたー。すごーい。Ｎちゃんおりこうね…。」（頭をなでながら）	◎嫌がることもあったが，教師が先にスイッチの所まで行き言葉かけをすると本児が自分でやりたい様子（＝「のんのん，やる。」と言ってあわててスイッチの場所に近づいてくるなど）が見られ，係活動としての意識が芽生えたと思われる。その結果として，短い時間で取り組むことができた。 ・スイッチを消す際，２つを消し１つ残ってしまう時もあったが，残っているスイッチを指さして知らせると消すことができた。 ◎褒められると，自分の頭をなで，喜ぶ様子が見られた。

短期目標３	言葉かけと見守りで，電気係の活動に取り組むことができる。
手　　だ　　て	変　　容
・確実に３つのスイッチを消すことができるよう，スイッチの横に色シール（赤，青，黄）をはっておく。 ①言葉かけをして様子を見守る。 「Ｎちゃん，電気係，お願いね。」「はーい。」 ・活動を促されると，やりたくても一度目は「やだ…。」との返事になってしまうことが多い。やりたい時は「はーい。」と返事ができるような，望ましい意思表示の仕方を設定した。 ②１～２つのスイッチで止めてしまった時は本児から２ｍ程度離れ再度言葉かけをし，様子を見守る。 「Ｎちゃん，全部消せたかな？上を見てごらん。」 取り組むことができた時には賞賛する。 「全部消すことができたね。すごいなー。」 「Ｎちゃんが電気を消してくれたので，先生もお友達もとっても助かるね…。ありがとう。」	・係活動への言葉かけ後，教師が「はーい。」と言い，繰り返し返事のパターンを作ってきたこともあり，言葉かけをすると「はーい。」と返事が返ってくるようになった。また，言葉かけ後の活動への取りかかりが，スムーズになった。 ・電気係の活動がスムーズになるに従い，離れた場からの言葉かけでも，活動に取りかかれるようになった。 ・シールをはったことで，消し忘れがあった時の場所の確認がしやすく，「まだついているのがあるね。赤は消せたかな？」などの言葉かけですぐに消すことができた。

(4)　まとめ

・毎日決まった時間・場所での活動は，身に付きやすく，さらに見通しをもって取り組めるようになった。

・一緒に取り組む際，言葉での促しと共にごっこ遊びも取り入れたことで，係活動に楽しく取り組め，活動への取りかかりがスムーズになり，導入という面からは効果的であった。

◎本児の興味をひく分かりやすい言葉かけをしながら一つ一つの活動を行ってきたことで，慣れてくると本児からも活動の際に「それー。」，「できたー。」などの言葉が出てきて，係活動への意識を育むことにつながり有効であった。

◎自分で消すことができ，教師に褒められると，嬉しそうな表情をしたり，自分で自分の頭をなでる様子も見られ，賞賛が次への活動の意欲につながった。

・電気係は教師とのかかわりの中で行ってきたが，周囲の大人とのかかわりは増えてきているので，今後は友達とのかかわりがあるような係活動を設定し，かかわる人の輪を広げ，コミュニケーションの幅を広げていきたい。

・係活動に慣れスムーズになるにつれて，教室以外の場でも言葉かけや指さしで活動に取り

組むことができた。遊びから学習へ移る際，教師が遊びの時間が終わりであることを知らせ電気を消すと，本児のやりたい様子が見られた。遊び終了時に自分で電気を消す活動を取り入れると，遊び場面から学習場面への気持ちの切り替えがスムーズに，早くなってきた。しかし，体調が悪かったり，休みが続いたりすると難しくなることもあるので，今後の課題である。

2　「日にち調べ係の活動等を通して自分から手順通りに取り組むことができることを目標とした指導例」（区分－B）

(1)　対象児について

○対象児　　小学部４年　10歳　男

○主障害　　自閉症

○諸検査　　田中ビネー知能検査　ＩＱ－測定不能

　　Ｓ－Ｍ社会生活年齢　４歳５か月

○目標に関する実態

＜役割に関する実態＞

・給食準備時間に，自分でふきんを絞り，友達の机や給食台を満遍なくふくことができる。しかし，途中で活動をやめてしまうことがあり，教師の見守り，言葉かけを必要とする。また，牛乳，ストロー，デザートを人数分数えて配ることができる。

・見守りで，下校の準備時間に小学部教官室に行き，プリント等の配付物を取って来て，一人一人のファイルにはさむことができる。ただし，ふざけてしまってファイルにはさむ取り組みが遅れることがある。

・活動の定着には時間がかかる。しかし，パターン化しやすい，毎日行う活動や手順通りにできる活動には見通しをもち，意欲的に取り組むことができる。

＜その他＞

・友達と遊ぶことよりも，一人で三輪車に乗ったり，絵本を読んだりすることを好む。

・全校朝会等，多人数で過ごす時間に自分の場所を離れたり，手足をぶらぶら動かしたりすることが見られる。

・衣服の着脱や排泄等生活全般はほぼ自立しているものの，自分の順序などにこだわる場面が見られる。

・要求がある時などに発声はあるものの，表出言語はない。

(2)　指導方針

○カード等を黒板近くに整理して配置し，係活動に取り組みやすいようにする。

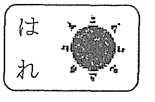
○一つ一つの活動については，「一緒に」，「補助」，「言葉かけ」，「見守り」等で本児の定着度に合わせて教師がかかわるようにする。

○手順を設定して見通しをもたせることで，活動に取り組もうとする意識を高めるようにする。

◎朝の活動全体の手順表を作成し，手順表を使って，自分から進んで活動できるようにする。

◎賞賛することにより，自信をもたせ，自分から進んで係活動に取り組めるようにする。

(3) 指導ステップと対象児の変容　　（指導期間　平成12年５月～平成13年３月）

<table>
<tr><td>短期目標１</td><td colspan="2">言葉かけで，日めくりカレンダーめくり，黒板に日付，天気，日直の氏名カードをはることができる。</td></tr>
<tr><td colspan="2">手　　だ　　て</td><td>変　　容</td></tr>
<tr><td colspan="2">①日めくりカレンダーを１枚ずつ毎日めくり取る活動を設定し，今日の日付を黒板に掲示できるようにする。また，黒板の横に日付，天気，日直の氏名カードをつけておき，取り組みやすくする。
②日付，曜日，日直の氏名カードを教師が順番に並べておくことで，前日との比較で児童が選びやすいようにする。
③教師が，「今日の天気は晴れ。」等の言葉かけをすることで，天気への意識付けをする。
・言葉かけを受けて，係活動に取り組んでいる時には，「よく頑張ってるね。すごいね。」と言葉かけをして賞賛する。</td><td>・カレンダーの数字を見て日付のカードを選び，はり替えができた。
・言葉かけを受け，順番通りにカードのはり替えが大体できた。
・教師の言葉を聞き，天気のカードを選び，はり替えができた。
◎褒められた時，にこにこ笑ってよい表情を見せる時があった。</td></tr>
<tr><td>短期目標２</td><td colspan="2">言葉かけや見守りで，黒板に日付，天気，日直の氏名カードをはることができる。</td></tr>
<tr><td colspan="2">①朝の活動の手順表を机の上に明示し教師とあいさつをしたら，活動の手順表に着目するように言葉かけをする。
②朝の活動を順に取り組むように言葉かけをする。
③絵（天気カード）の補助で，天気カードを正しく選べるようにする。窓際で太陽や雲の様子を見るように言葉かけをして，「晴れ」か「曇りか」を選べるようにする。
・係活動の始めとして，自分から進んで，日めくりカレンダーを１枚ずつ毎日めくり取りをした。活動への意欲を認めて，「係活動を始められてえらいね。」と言葉かけをして賞賛する。
・短期目標１と同じ活動の流れで補助を減らし，見守り言葉かけ，賞賛で活動を促す。
<table><tr><td></td><td>なにをする</td></tr><tr><td>1</td><td>かばん</td></tr><tr><td>2</td><td>きがえ</td></tr><tr><td>3</td><td>かかり</td></tr></table>  </td><td>・手順表を明示したことから，着替えをした後に，係活動をすることが分かった。自分から活動に取り組む姿が見られた。
・日付カードは，日めくりカレンダーを見て，月曜日でも正しく選ぶことができた。
・天気カードは，「今日は，くもり。」と教師の言葉かけが必要な日もあった。
◎着替えが終わると，遊びだしたり，本を読んだりすることなく係の活動に取り組む姿が見られた。</td></tr>
</table>

短期目標３　活動の手順表を見て，朝の活動に取り組むことができる。

・活動の手順表を右のようにして，本児の机にはり付ける。手順表の上に自分の顔の付いた磁石を順に動かす活動を設定する

	あさのかつどう	なにをしている
1	かばん	
2	きがえ	
3	かかり	
4	といれ	

①今自分が，何をすればいいのかをを分かるようにするため，始めは，手順表に磁石を教師が置き，動かす。「今度は，着替えだね。」等と言葉かけをする。

②慣れてきたら，自分で動かすように言葉かけをする。活動ごとに磁石を動かしているか見守り，もし忘れていたら言葉かけをして，活動を促す。

③進んで活動に取り組んでいる時は，「係活動が上手だね。」と言葉かけをして賞賛する。

・短期目標２の活動も継続して指導し，係活動への意欲をさらに高める。

◎手順表を見ることで，一連の活動に進んで取り組むことができるようになった。

◎活動ごとに，自分の顔の付いた磁石を動かすことに興味をもって意欲的に取り組んでいた。

・日付，日直の氏名カードを正しく黒板にはり替えることができるようになった。

◎天気のカードを選ぶ時には，本児から教師へ進んで確認を求めることが増え，意欲の高まりがみられた。

◎正しく天気を選び，褒められた時には，うれしそうな表情を見せ，満足そうであった。

短期目標４　自分から進んで，朝の活動に取り組むことができる。

①日にち調べ係頑張りカードを用意し，朝の活動を終了したら一枚ずつシールをはる活動を設定する。

②「さすがＨくん，最後までできてえらいね。」と言葉かけによる賞賛とシールによる賞賛を行う。

短期目標２，３の活動も継続して指導し，係活動への意欲をさらに高めるようにする。

(教材)日にち調べ係頑張りカード(カレンダー形式)

Ｈくん　かかりのしごとが
おわったらシールをはろう

２０００　１２

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
					1●	2●
3●	4	5	6●	7●	8●	9
以下	略					

・シールをはる活動は（その日の日付の所）場所を間違うことがなかった。

◎シールをはることを大変に喜び活動が終わったら，すぐにはろうとしていた。ただ，係活動前にシールをはることもあり「係の仕事がおわってからね」と言葉かけをして，指導を継続する必要がある。

・天気カードは自分の選んだカードを教師に見せ，確認を求めるようになった。

(4) まとめ

・日付，曜日，日直の氏名カードを取りやすい場所に置き，順番に並べておいたことで，活動に取り組みやすくさせることができた。

◎言葉かけと共に教師が一緒に活動し，手を添えるなどの補助をすることで，最後まで活動を行うことができ，本児の自信となって，活動の定着と意欲の向上を図る上で有効だった。

◎日にち調べ係として，本児の机上に手順表を明示したことは，（係活動以外も含むが）登校してからの活動への見通しをもたせやすくすることができ，意欲を持続させることにつながった。

◎シールをはる活動を設定することにより，本児への視覚的な賞賛となり有効だった。

・今後は，手順表の明示をなくしても朝の活動に取り組んでいく指導を行っていきたい。

◎天気のカードを選ぶ時には，教師に対してコミュニケーションをとろうとしていた。今後は，係活動をした時に，「学級のみんなが助かるよ。」などの学級を意識した言葉かけすることにより，集団の一員という意識を育てていきたい。

Ⅳ　まとめと今後の課題

小学部では，学部テーマを「共に活動し意欲を高めるための支援の在り方」として実践研究をしてきた。その中で，「個人カルテ」の「集団参加」領域の下位項目「役割」に着目し，その一部である係活動を中心に研究を進めてきた。

係活動を４つの区分で分類し，そこから発達段階に即して児童一人一人に課題を設定し，それを目指して段階的に指導していった結果，次のことが分かった。

係活動の発達段階に即した４つの区分については，まだまだ改良の余地はあるが，段階的に指導するにあたり活動に対するねらいの数を増やしたり，他者とのかかわりをもたせるという視点を用いることは有効であった。

活動に対する「ねらいの数を増やす」ことにおいては，発達段階が進むにつれ活動数を増やし，その１つ１つにねらいをもたせることで，一人で確実にできることを増やすことを目指すことが大切である。一方，「他者とのかかわり」をもたせることについては，コミュニケーションの育成と係活動に対する充実感，責任感をもたせることを可能にした。これらのことにより，係活動の４つの区分の段階的な目標設定の目安「Ａ→（ＢｏｒＣ）→Ｄ」を導くことができた。

次に，係活動の指導に関しては，教師や友達とのかかわりと活動を徐々に増やしていくことが重要であるということが分かった。（増やす方向は，上記の目標設定の目安を参考にし検討する。）さらには，早い段階での意識・意欲面の育成は，係活動の４つの区分のＤに近づけていく上で大切であることも分かった。

以上の指導から，係活動を共に活動し支援することは，「活動への意識の芽生え」「意欲の向上」「責任をもって取り組む姿勢」といった意識・意欲の面が，事例でふれた「気持ちの切り替えが早くなった」「自分から手順通りに取り組むようになった」といった多方面へと広がりを見せ，「社会参加」への基礎作りとして有効であるという結論に至った。

今後は，「役割」の範疇をどこまで拡大し，「しごとをする」が社会参加に結び付いていることを明らかにする支援の実践に取り組みたい。これは，意識・意欲の高まりを「係活動」以外の多側面をとらえることが可能かについての検討とも言える。なぜなら，社会参加の基礎を培う小学部としての視点を「意識・意欲の高まり」に置いたことで，中学部や高等部へつながる意味での「意欲の基礎」について検討を行い，現在及び将来の子どもたちの望ましい「社会参加」を探求していきたいと考えるからである。